# 「地域教育実践演習」の授業づくり

霜川　正幸

Planning a Lesson on “Seminar in Development of School Program Collaborating with Community”

SHIMOKAWA Masayuki

（Received January 10, 2012）

キーワード：教員の資質能力、現代的課題、学校・家庭・地域社会の連携、授業づくり

## はじめに

言うまでもなく、子どもたちに最も大きな影響を与える教育環境は「教員」であり、その資質能力の向上は、養成・採用・研修の一体的取り組みの中で求め続けられるべきである。中でも、教員養成を託される大学は、その位置づけや責務を自覚し、教員としての見方考え方、教職に関する専門的知識や技能等を身につけた人材を輩出すべく、教職課程の工夫改善による充実深化に取り組む必要がある。

筆者は、本学部において「教職に関する科目（教職概論、教育実習事前事後指導等）」、「（小学校教育コース）指定科目」等を担当する傍ら、大学教員として、また公立学校教員、学校教育・社会教育行政経験者として、学校管理職やミドルリーダー等を対象とした教員研修会に参画する機会が多い。その中では、現在の教育や学校を取り巻く社会や環境の変化、現代的課題、学校組織の現状や経営、運営上の課題等が具体的に語られるとともに、今後の教員のあり方や教員としての資質能力等について活発に意見交換される。多くが次代を担う教員を養成するにあたり貴重かつ示唆に富む内容であり、教員養成に反映すべきものが多い。

特にここ数年、子どもたちの学力の向上、心（人間性）の育成、生活の健全化等に関する学校への期待の高まりと背景にある家庭・地域社会の教育力低下の指摘や、学校の組織力や教職員構成、環境に応じた経営、運営力についての反省を耳にすることが多くなった。同時に、今後の学校教育にあっては、学校・家庭・地域社会がそれぞれの教育機能を果たし連携すること、地域ぐるみで子どもを育てる意識を醸成しその具体的手立てを講じること、学校の組織力、教職員の意識改革と連携に関する知識技能を高めることが重要と共通理解される場面も増えている。

筆者は、本年度（平成23年度）から「小学校教育コース指定科目」として開設された「地域教育実践演習（3年前期：2単位：32人受講）」を担当している。学校や地域等教育現場の実情、現職教員の声や教育委員会の期待等をもとに本授業を構想、運営しており、その具体を報告、提案する。

## １．「地域教育実践演習」の授業づくり

「地域教育実践演習」の授業づくりにあたっては、「はじめに」でふれた教員研修会からの視点に加えて、次項を背景とし、授業の内容、構成、計画、指導者、会場等を構想した。

### １－１　学校・家庭・地域社会の連携をめぐる動向から

子どもたちの健全育成や「生きる力」の育成にあたっては、学校だけがその教育権限を有するのではなく、学校・家庭・地域社会の連携協力、各教育力の有する機能の融合により成り立つとの考え、見解やその実践、施策は目新しいものではない。

「『生きる力』は、学校において組織的、計画的に学習しつつ、家庭や地域社会において、親子の触れ合い、友達との遊び、地域の人々との交流などの様々な活動を通じて根づいていくものであり、学校・家庭・地域社会の連携とこれらにおける教育がバランスよく行われる中で豊かに育っていくものである。」[1)]と指摘した「中央教育審議会答申」以降、様々な公的文書、出版物、印刷物に同様の考え、見解や報告が述べられている。2006年12月「教育基本法」改正では「第十三条　家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」が新設された。

政策事業としては、文部科学省が2004年度に「緊急3ヶ年計画」としてスタートさせた「地域子ども教室推進事業」を、2007年度から「放課後子ども教室推進事業」（厚生労働省「放課後児童健全育成事業」と合わせて「放課後子どもプラン」）として発展させ現在に至っている。保護者、地域住民や学校教員等が連携協力し、子どもたちに放課後や週末の遊び場、生活の場を提供し、学習、芸術文化、スポーツやふれあい交流等の活動を行っており、全国の小学校区での実施を目指して進められている。2008年度からは、学校教育活動に対して家庭や地域社会が組織的支援を行うことをとおして、学校教育の充実や学校・地域間連携の強化を図る「学校支援地域本部事業」も加わっている。また、学校と地域が一定の権限と責任を持って学校運営に関わる「学校運営協議会制度（コミュニティー・スクール）」も動き出している。

これらの動きの背景について、笹井[2)]は、「子どもの『生きる力』が、近年、著しく低下してきていること」、「学校や教員の活動をめぐる環境が大きく変わってきていること」、「ボランティア活動や市民活動の興隆」の3点を示し、「これまで多くの関係者から同様の指摘を受けながら、学校・家庭・地域住民の連携協力がなかなか進展してこなかった要因は、ほとんどの人たちに必然性や理念は理解されるものの、その実現にあたっての方法や条件が研究レベルでも実践レベルでも、明らかにされてこなかったことにある」と指摘している。今後の学校教育や教員養成のあり方に貴重な提案もしている。

「地域教育実践演習」の授業づくりにあたっては、これらの動向や取り組みの具体等について盛り込むこととした。

### １－２　求められる学校像、教員像と授業とのつながりの視点から

今後求められる学校像、教員像について、中央教育審議会[3)]は次のように指摘している。「これからの学校は、子どもたちの知・徳・体にわたるバランスの取れた成長を目指し、高い資質能力を備えた教員が指導に当たり、保護者や地域住民との適切な役割分担を図りながら、活気ある教育活動を展開する場となる必要がある。また、これからの学校には、保護者や地域住民の意向を十分に反映する信頼される学校となるため、教育を提供する側からの発想だけではなく、教育を受ける側の子どもや保護者の声に応える教育の場となることが求められている。」

これらの学校像に描かれる教員像は、まさに各地の教員研修会で管理職や教育委員会が語る「現場が欲しい教員像」でもある。本授業の構想にあたっては、特に本授業が取り扱うべき内容をふまえ、「保護者や地域住民の役割、学校・家庭・地域社会が有する教育機能と連携協力による可能性等を理解し、地域における教育資源（人材、環境、施設等）の開発（把握と価値付け）、豊かな教育活動の創造（企画立案）、教育活動実施にかかる組織的動き（連絡調整、準備、実践、評価等）を具体的に考えられる学生」をめざす学生像としてイメージすることとした。

そのため、学生一人一人が目的意識と意欲をもち参画できる学習方法や形態、外部指導者の積極的な活用や学外実習・体験等の導入を図ることとした。

なお、授業や活動の内容と教育現場における課題、教育実践とのつながりは常に伝え、自らの課題として意識させることとした。これは、諏訪ら[4)]の「大学での学問と学校現場での教育実践を統合させて考える機会が教員養成のなかに保証されるべきではないか。そのためにも、大学教員が自分の担当する授業科目が学校現場の実践とどのように結びついていて、学校現場が抱える教育課題にどう貢献しうるのかについて自覚的である必要がある」に共感し、大学教員と同様に、学生にも自らの学びと教育実践とのつながりを意識させたいと考えたことによる。

### １－３　社会教育（学校外連携等）に関する科目履修の視点から

前項までに示した教員像、とくに学校・家庭・地域社会の連携協力、各教育力の有する機能の融合等を

コーディネートでき、学校教育の質的充実をリードできる学校教員の養成にあたっては、生涯学習、社会教育等に関する基礎的な知識技能や実習（模擬体験を含む）が必要と考える。

社会教育主事養成課程・コースを有する大学や社会教育主事講習では「生涯学習概論」「社会教育計画」「社会教育特講」等の中で学ぶことが可能であるが設置大学、機関等は限られる。また、人類共通や社会全体のテーマを演習で学ぶ「総合演習」が「教職実践演習」に切り替わったこと、教育ボランティアや学外活動等の増加に伴い学生の学びにゆとりがなくなりつつあること等もあり、生涯学習、社会教育等に関する内容は、教育原理、教育法規や教育制度等について学ぶ授業でふれられる以外は少ない。本学部においても非常勤講師により授業科目「社会教育」が開設されているが、「必修」「選択」等の指定はなく、受講学生数も57人（本年度：研究科聴講生等を含む）にとどまっており教職志望学生の一部が履修しているに過ぎない。

そこで、「地域教育実践演習」の授業づくりにあたっては、生涯学習、社会教育の基礎知識を理解させること、学外において社会教育関係団体、地域教育力の活性化に取り組んでいる関係者等との協働体験により学校外の教育力、教育資源等への関心意欲や連携にかかる技能等を具体的に学ばせることとした。

## ２．「地域教育実践演習」の実際

### ２－１　授業のねらい、授業計画等

授業びらき「第1時（オリエンテーション）」にあたり、本授業のねらい、授業履修上の理解事項、授業担当者、評価方法、受講上の留意事項や授業計画等について説明し、学生一人一人の目標設定をさせた。ここでは、授業のねらい、授業履修上の理解事項、授業計画（概要）について示す。

(1)　授業のねらい

小学校教育と地域教育力の連携・融合方途を探る科目として

生涯学習社会における自己実現とそれを支える地域の教育力（学校・家庭・社会教育）の機能、現状や課題等を理解するとともに、小学校と地域の「協働」が地域教育力の活性化や教育の充実に果たす意味を考察し、自ら「協働」を創造し実践していく知識技能や実践的態度を身につける。

(2)　授業履修上の理解事項

１　授業の形式は「小グループによる演習・実践」＋「全体発表・討議」や、大学教員、外部指導者等による「講義（指導助言）」を基本とする。

２　授業の性格上、個人や小グループを単位として、様々な教職体験、地域における協働実践（授業時間外や週休日を含む）に参画することを基本とする。

３　教職に関する学びの蓄積を行うため、「教職協働実践Ⅰ・Ⅱ」で活用した「発見ノート」への継続的な記録と保管、授業各期での振り返り等を行うことを基本とする。

(3)　授業計画（概要）

【第１クール（生涯学習、社会・家庭教育、各教育の効能等に関する基礎的理解）】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第 1時： | 【オリエンテーション】 | 授業概要説明、受講上の理解事項等 | （課題把握と個人研究） |
| 第 2時： | 【演習・講義①】 | 生涯学習と自己実現 | （演習・講義） |
| 第 3時： | 【演習・講義②】 | 生涯学習社会と社会教育、家庭教育等 | （講義） |
| 第 4時： | 【演習・講義③】 | 学校教育と各教育の機能、地域のつながり | （演習・講義） |

【第２クール（ゲストに学び、教員となった自分が考える学校と地域の連携協働）】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第 5時： | 【実践事例研究①】 | 学校と家庭の協働を学ぶ（ＰＴＡ活動） | （指導講話、研究協議） |
| 第 6時： | 【実践事例研究②】 | 学校と家庭の協働方途を探る、練る | （実践事例研究） |
| 第 7時： | 【実践事例研究③】 | 学校と地域の協働を学ぶ（子ども会活動） | （指導講話、研究協議） |
| 第 8時： | 【実践事例研究④】 | 学校と地域の協働方途を探る、練る | （実践事例研究） |
| 第 9時： | 【実践事例研究⑤】 | 学校と地域の協働を学ぶ（まちづくり） | （指導講話、研究協議） |
| 第10時： | 【実践事例研究⑥】 | 学校と地域の協働方途を探る、練る | （実践事例研究） |

【第３クール（これからの学校教育、マネジメントや新しい経営運営に関する基礎的理解）】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第11時： | 【演習・講義④】 | 信頼される学校～学校評価とマネジメント | （演習・講義） |
| 第12時： | 【演習・講義⑤】 | 信頼される学校～コミュニティー・スクール | （演習・講義） |

【第４クール（学校と地域の連携協働をコーディネートし、動かし、動く教職実習・体験活動）】
第13時～15時：【地域教育実践活動、研修活動①②③】
　地域における交流、教育支援活動の実際、地域教育力の活性化支援の実際、学校との連携の実際等
第16時～：【総括】　成果発表、レポート課題実施　（プレゼン、レポート）

### ２－２　第１クール（生涯学習、社会・家庭教育、各教育の効能等に関する基礎的理解）の実際

第１クールの学習内容と活動（第1時は「オリエンテーション」のため省略する）

第 2時：生涯学習と自己実現
- 生涯学習社会とは何か
- 生涯学習社会が求められる背景（急速な高齢化社会の進行、技術革新の進行、学歴社会の矛盾の表面化、「まちづくり」へのアプローチ）
- 生涯学習とは何か、生涯学習のイメージ
- 主な生涯学習関係理論、答申等の歩み
- 子どもたちに教えたいこと、学校教員とともに考えたいこと

第 3時：生涯学習社会と社会教育、家庭教育等
- 生涯学習と生涯学習活動
- 生涯学習活動の内容（自己の充実、生活の向上、職能の向上）
- 生涯学習の構造（垂直的統合、水平的統合、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマル）
- 生涯学習社会における各教育の立ち位置
- 生涯学習社会における各教育機能
- 学校教育と教育基本法第６条、学校教育法第１条
- 家庭教育と教育基本法第１０条
- 社会教育と社会教育法第２条、教育基本法第２条

第 4時：学校教育と各教育の機能、地域のつながり
- 各教育機能の連携、地域のつながり
- 学校教育の課題と今後のあり方
- 小学校学習指導要領に見られる時代の方向

第2時～第4時では、学習内容が幅広く多岐にわたること、講義に充てられる時間に限りがあること等から、授業レジュメや資料の事前配布、予習課題による事前学習を行った。第3時はほぼ講義形式で実施したが、第2時と第4時は、1単位時間の半分強となる50分を講義形式で、40分を5～6人単位のグループでのワーク形式で行った。第2時では生涯学習のイメージや内容、ねらい等について、第4時では各教育機能と学校教育の関わり等について「ＫＪ法」「ランキング」手法による学習を行った。(図1）ほとんどの学生は「生涯学習」「社会教育」や「家庭教育」等について理解がなく、イメージもまちまちであったことから、グループワークをとおしてお互いの既存知識、イメージ、質問や誤解していたこと等を出し合うことにより、学習の深まり、次時の学習へのつなぎや仲間意識、学習への不安感の払拭等があったようである。

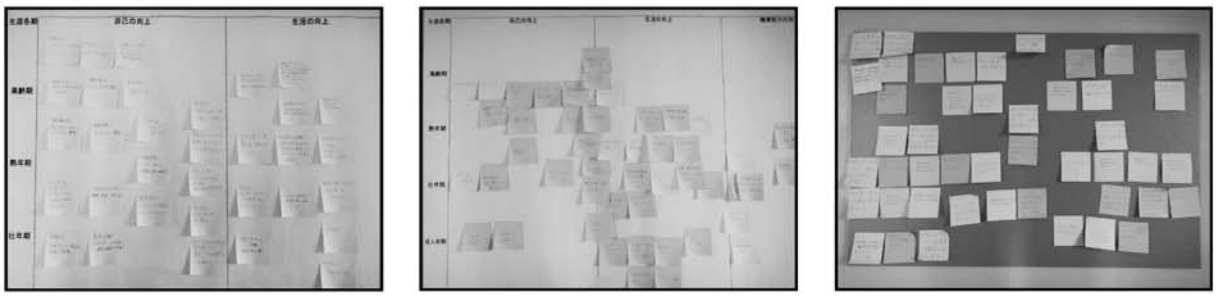

図1　グループで整理したカード

### ２－３　第２クール（ゲストに学び、教員となった自分が考える学校と地域の連携協働）

第２クールの学習内容と活動（第6・8・10時「グループ別学習」については後に示す）

第 5時：学校と家庭の協働を学ぶ（ＰＴＡ活動をとおして考える）
講師：山口市立大殿小学校ＰＴＡ会長　垣村敏彦
内容・ＰＴＡ（育友会）とは何か
・ＰＴＡ（育友会）組織の仕組み
・活動の実際と子ども、教職員に見える効果
・ＰＴＡ活動と学校教育活動のつながり
・ＰＴＡの課題と今後の方向性　等（図2）

図2　授業の様子と資料（一部）

第 7時：学校と地域の協働を学ぶ（子ども会活動をとおして考える）
講師：山口県子ども会連合会事務局長　山本哲哉
内容・子ども会とは何か
・子ども会、育成者組織の仕組み
・活動の実際と子ども、教職員に見える効果
・子ども会活動と学校教育活動のつながり
・子ども会の課題と今後の方向性　等（図3）

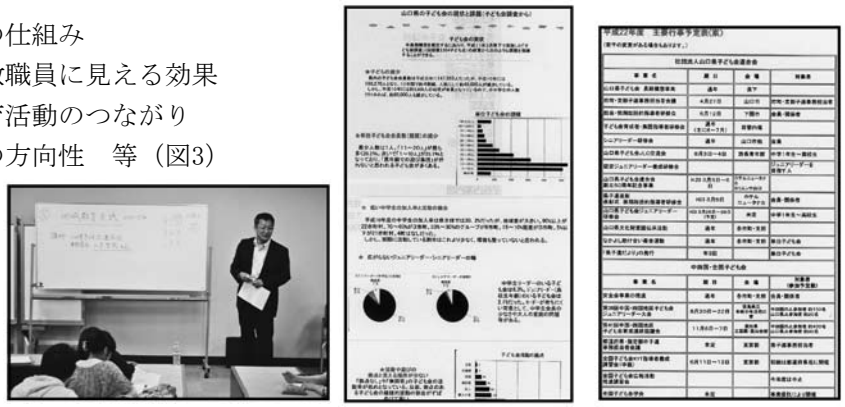

図3　授業の様子と資料（一部）

第 9時：学校と地域の協働を学ぶ（まちづくり、地域づくりをとおして考える）
講師：周南市周陽公民館　館長　内山紘一
内容・公民館とは何か、地域交流センター等首長部局組織との違いは何か
・公民館の仕組み、活動の実際とまちづくり、地域づくり
・公民館活動（生涯学習、青少年・家庭教育等）と子ども、学校
・公民館活動と学校教育活動のつながり
・公民館等の課題と今後の方向性　等（図4）

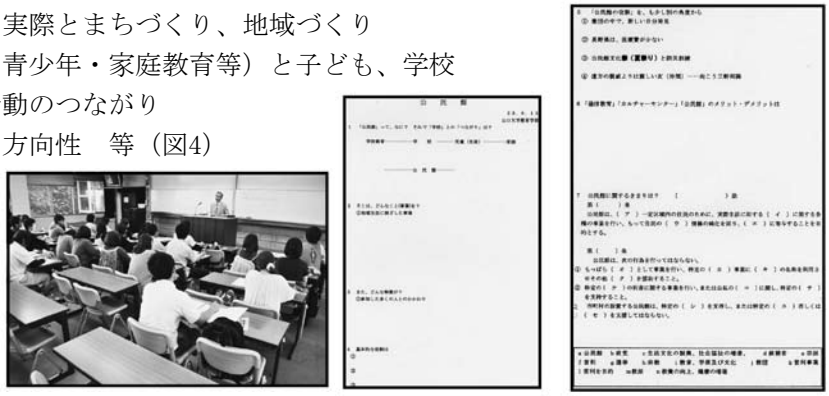

図4　授業の様子と資料（一部）

第5・7・9時には外部指導者（ゲストティーチャー）を招聘し、ＰＴＡ、子ども会、公民館の機能、ねらい、組織、活動等の実際や学校との連携状況、子どもや学校の変容、教育的効果等について実践報告、質疑応答、協議を行った。団体、機関の選定についてであるが、ＰＴＡと子ども会は、多数の社会教育関係団体の中から学校との連携実績の高さに鑑みを選定した。公民館については、地域社会教育関係団体事務局を公民館主事等が担当するケールが多く、地域の「とりまとめ」的存在である、地域生涯学習の拠点施設である、地域交流センター等首長部局所管施設に移行したケースにあっても公民館機能は残ること等から選定した。

外部講師による実践報告を60分、質疑応答、協議に30分を充てたが、学生から多数の質問や意見が出され時間が不足する状況であった。学生にとっては、自分自身の子ども会やスポーツ少年団活動の経験、公民館行事への参加等を思い起こすとともに、当時は見えなかった学校、教職員との連携の様子、教育的な意図や教員としての関わり方等を学ぶ貴重な機会となったようであった。行事一つとっても、教育的意図、子どもを中心に据えた計画立案、準備、運営、事後評価等があり、ＰＤＣＡサイクルを中心としたマネジメントが働いていることを理解できたようであった。

外部指導者による授業後の時間（第6・8・10時）には、前時の学習をふまえて、「自らが教員となった際に、学校外関係者、関係団体・機関等との連携による教育活動をいかに構想するか」をテーマとしたワーク（提案発表、質疑応答、協議）を行った。筆者は、学生に対して、様々な教職に関する体験や教育実践の理解をただ単に体験、理解に終わらせることなく、それを受けて自らが教員になったとの想定の上、様々な条件を把握し、あらゆる可能性やリスクを判断しながら、子どもを中心に据えた実効性ある教育活動を「提案できる人材」になるよう求めている。授業時間はそのグループ別発表等に充てるため家庭での作成課題となるが、ユニークで創造的な提案も多数出され貴重なワークとなった。

課題とした設定、内容や項目等を示す。（例：学校とＰＴＡとの連携協力の提案）

地域教育実践演習⑥【課題：地域の豊かな教育力と連携する（学校とＰＴＡの連携協力）】
次回授業に向けた演習課題　（垣村敏彦ＰＴＡ会長のご講義を参考に）
あなたが小学校教員になったら、「ＰＴＡ」と一緒になって（連携協力して）、どんな活動、取り組み（プロジェクト）をしてみたいと考えますか。具体的なプランを提案してください。

【活動やプロジェクトのタイトル】
【活動やプロジェクトの具体】（具体的にプランニングすること）
・活動の対象児童（全校？ 学年限定？ 学級限定？ その他？）
・活動の扱い（教科？ 道徳？ 特別活動？ 総合的な学習の時間？ 外国語活動？ その他？）
・活動の場所（教室？ 特別教室？ 体育館？ グラウンド？ 学校外？ その他？）
・活動の内容や流れ、役割分担、準備等（活動の流れにそって具体的に）
【活動やプロジェクトのねらい（目的）】（この活動をとおして何を求める、どういう変化を期待するか）

### ２－４　第３クール（これからの学校教育、マネジメントや新しい経営運営に関する基礎的理解）

第３クールの学習内容と活動

第11時：信頼される学校～学校評価とマネジメント
・学校マネジメント
・学校評価の必要性と目的（閣議決定「新成長戦略」、文部科学省「学校評価ガイドライン」）
・近年の動向と学校評価に関する法令規程
・学校評価の種類（形態）と手法（自己評価、学校関係者評価、第三者評価）
・学校評価の種類（形態）と配慮事項、手順
・その他の事項（児童生徒・保護者対象のアンケート、「外部評価」の用語）
・学校評価の精度を高める（情報提供の必要性と期待される効果、情報提供に関する規定、情報提供の在り方、ホームページを活用した情報提供、情報提供に当たっての留意事項）

第12時：信頼される学校～コミュニティー・スクール（新しい学校経営、運営の取り組み）
・コミュニティー・スクール（学校運営協議会制度）とは
・新しい公立学校運営の仕組みとしての導入の背景
・学校・家庭・地域社会の連携の必要性
・コミュニティー・スクール（学校運営協議会制度）の目的と設置等
・コミュニティー・スクール（学校運営協議会制度）の運営

第3クールでは前時までの学習をふまえて、これからの学校経営、運営をシステムの面からとらえさせることとした。第11時では、学生たちが進む学校（職場）が果たして組織として機能しているのか、協働的職

場風土と同調的職場風土という異なる職場風土が共存し多元性と多方向性という組織特性を有する中で学校マネジメントがなぜ求められるのか、子どもの現状、学校の組織規模や年齢構成から若年教員が学んでおくべきことは何か等をふまえて、組織マネジメントの基礎や学校評価の実際について講義形式で行った。また、学校マネジメントにあって重要な役割を有する学校評価の実際を報告し、学校自己評価書サンプル等も紹介した。第12時では、地域課題と地域解決という今後の地域づくり、まちづくりの考え方をふまえて、特色ある学校づくりや地域とともに創り上げる学校づくりの形として導入が進む「コミュニティー・スクール」を取り上げた。学生は自分自身が教員となった時を想定しながら、地域が一定の権限と責任をもって学校運営に参画するという考え方、プロセスの重要性や学校情報の発信の意味等について学んだようであった。（図5）

図5　学校評価、コミュニティー・スクールの授業資料（一部）

### ２－５　第４クール（学校と地域の連携協働をコーディネートし、動かし、動く教職実習・体験活動）

第4クールは、本授業での学びを実際の教職実習・体験活動として具現化するとともに、地域の豊かな教育資源（人材、環境、施設等）の中で学びや教員としてのあり方を深めるために設定した学習である。

学生が学校、地域等が行う教育行事に参加することは多々あるが、主催団体が全てを決定した上でその運営の一部を支援する形になっていることが多い。ある意味で「お客さん」であり、自ら積極的にアイデアを出し、協議や役割分担の上で関わり、他部署をカバーし、最終的に他者から評価され責任の一部を負うというレベルまでたどり着かない。しかし、教員は子ども、保護者や地域住民等との教育活動を仕組む場合「お客さん」では済まされない。主催者、主管者としてなすべきこと、行事運営をとおした地域との連携のあり方、地域に貢献し地域から信頼される教員のあり方等について学ばせたい、経験させたいと考えた。

授業は、週休日・祝日に開催される地域行事に合わせて行うこと、活動時間が7時間を超えることから3コマ（単位時間）を充てること、開催日程と学生の部・サークル活動、教育ボランティア、アルバイト等の予定が重なる可能性があることから2グループ（行事）に分けて行うこと、学外活動に伴う大学保険（学研災・学研賠）加入を義務づけること、子どもや学生自身の事故防止、安全・危機管理のための研修として事前に救急救命法講習（赤十字病院職員による）を実施することとして行った。

実際の授業（活動）は次のとおりである。（図6・7）

【第１グループ】

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 取り扱い | 平川小学校おやじの会、平川地域交流センターと小学校教育コース共催事業<br>後援：平川地区青少年健全育成協議会、九遊会 |
| 2 | 授業会場 | 山口市椹野川漁業協同組合　山口市平井340-1　TEL 083-922-3537 |
| 3 | 共催行事 | アユとったど～！<br>平成23年7月18日（月・祝日）10：00～14：00（8：00集合、15：30解散予定）<br>対象　平川、秋穂、大歳地区の幼児児童生徒、保護者等　約200人 |
| 4 | 運 営 等 | 行事運営は、平川小ＰＴＡおやじの会関係者、平川地区役員約20人と、学生スタッフ（小学校コース）で行う。 |

【第２グループ】

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 取り扱い | 大殿地区青少年健全育成協議会と小学校教育コース共催事業 |

2　授業会場　　大殿地区天神川（天神橋と東山橋間の河川敷）山口市古熊3丁目
3　共催行事　　第16回サバイバル川遊び
　　平成23年7月23日(土)9：00～14：00（8：00集合、15：30解散予定）
　　対象　大殿地区の幼児児童生徒、保護者等　約200人
4　運 営 等　　行事運営は、青少年健全育成協議会役員（民生児童委員、子ども会役員、大殿小・大殿中関係者）約50人と、学生スタッフ（小学校コース）で行う。

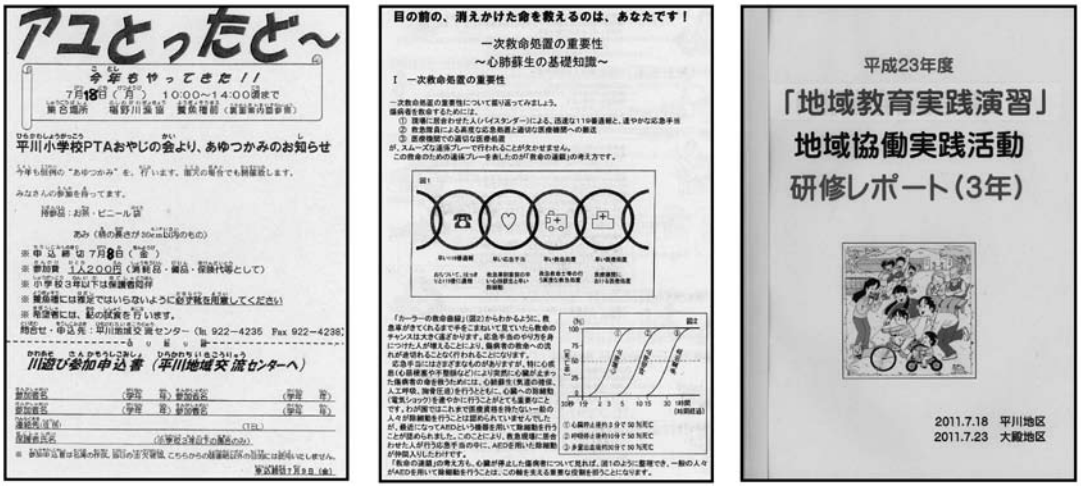


図6　行事チラシ、救急救命法講習資料、事後の「研修レポート（冊子）」

図7　行事当日の様子（上段：平川地区、下段：大殿地区）

行事に積極的に参画させる、主催者（当事者）意識をもって事業立てをさせるというねらいから、学生代表には、夜間開催ではあったが年度当初から準備会、実行委員会に参加させ、提案や意見等を出させた。また、学生集団との連絡調整、役割分担、事前打ち合わせ等を行わせた。行事当日は、学生全員が準備、運営等を行った。学生の参加により行事運営がスムーズになった、地域関係者に余裕ができ安全管理、報道対応等が充実した、学生による新しいアイデアも導入でき行事が活性化した等の気づきが寄せられた。

第16時では活動を終えての学びを発表し合い、個人レポートは「研修レポート」の形で整理し共有した。

このような地域連携を前提とした学生の教職体験や活動を計画する際に、授業担当者が行うべき用務は多い。教育的な意図と地域行事の趣旨とのすりあわせ、関係者、関係団体・機関等との交渉や連絡調整、夜間や週休日を含む各種会議への参加、学生の状況に応じた受け入れ体制や安全管理の協議、学生の学びと行事の成功を考慮した運営への関わり、事後評価と翌年度行事に対する検討等々である。しかし、それ以上に学生の学びは豊かで充実している。授業担当者のかける手間暇や物心両面の負担以上の成果があることも、学生のレポート等から間違いないと思える。同時に、学生の行事参画や結果のみに目が向いているように見える地域関係者や団体等であるが、実際は授業担当者自身の「地域に対するスタンス」が見られていることを念頭に置く必要がある。大学（学部、担当者）自身も「信頼される学校」にならなくてはならない。

## おわりに

授業終了後に行った「授業アンケート」では、本授業について「大変満足（87%）満足（13%）不満（0%）大変不満（0%）」（未提出：最終回欠席者2人を除く）という結果を得た。

・「生涯学習、学校と地域という大きなテーマだったが、ポイントをつかむことができ、また自分の身近な事象と関連づけて考えられるようになった。生涯学習という大きなフレームの中で学校教育や地域との連携を考えていきたい。（授業を振り返って）」

・「地域との関わりを中心に様々なことを学んだ授業だった。特にＰＴＡ、子ども会、公民館のことは直接お話が聞けたので今まで知らなかった内部のことまで知ることができ、自分も大人になったなと感じた。（今までは参加する身だったので）。このように学校が様々な機関や団体と連携することにより、子どもだけでなく、保護者、地域住民にとってもプラスになる、そういった取り組みが提案できるようになりたいと感じた。（授業を振り返って）」

・「保護者の方々と鮎を焼きながら話している中で、学校の先生が行事に参加してくれないという話題になった。保護者や地域の方々の思いを感じながら、教師が積極的に地域に参加すること、信頼を得ることの大切さを考えた。（地域協働実践を振り返って）」

・「自分が小学校の時、何気なくただ楽しいとしか思っていなかった数々の行事も、その裏にはこれだけ多くの人が関わり、多くの支え、協力、思いがあると実感した。この授業で、地域の存在の重要さを十分感じていたが、今回の体験はそれを再確認することになった。（地域協働実践を振り返って）」

・「鮎を捕まえるという体験は子どもにとってなかなかできない貴重な経験である。また今回のような活動をとおして、子どもと親、教師と親、家庭と地域がコミュニケーションをとれるところにとても魅力があると感じた。子どもたちの体験不足やコミュニケーション不足が心配される今こそ、今回のような地域行事や地域教育を大切にしていかなければならないと感じた。私が将来教員になることができ、かつ子どもができたとしたら、教師という立場と親という立場の両方を持つことになる。教師の立場では地域とつながっていくこと、親の立場では学校を支えていくこと、という気持ちを持ち続けていきたいと強く思った。とても充実した経験、授業だった。（地域協働実践を振り返って）」

授業中の発言や「授業アンケート」等から、学生たちは、今後の教員や学校教育は、学校・家庭・地域社会の有する教育機能を効果的にコーディネートし、地域ぐるみで子どもを育てる意識の醸成に学校がリーダーシップを取ること、そのためにも、学校マネジメントや教職員の意識改革による改善を進めること等について学んだようである。彼らが次代を担う教員として教壇に立つ日を楽しみにするものである。

本稿では、本年度開設した「地域教育実践演習」における授業づくりの具体をまとめたが、来年度に向け更なる授業改善に努める所存である。

## 引用・参考文献


１）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）」，中央教育審議会1997.7.

２）笹井宏益：「学校・家庭・地域住民の連携協力の基本原理にかかる考察」『学校・家庭・地域の連携と社会教育』，日本社会教育学会，10～21P，2011.9.

３）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」，中央教育審議会2006.7.

４）諏訪英広他：「小学校教員の資質能力の形成と養成カリキュラムに関する研究～小学校長の意識調査を中心に～」，川崎医療福祉学会誌 Vol21， No1.2011.65～75P.